

幾原邦彦『輪るピングドラム』論

——宮沢賢治の「りんご」のトポロジーから——

高橋優季

要旨

『輪るピングドラム』(2011)は、幾原邦彦(1964-)が監督・原案を務めた全24話のオリジナルアニメである。タイトルにある「ピングドラム」は幾原の造語であり、これについての説明や正体は最後まで不透明のままである。これまでの先行研究においては、オマージュが捧げられる宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』や、作中に登場する村上春樹の『かえるくん、東京を救う』と比較して論じられることはあったが、「ピングドラム」の正体を明らかにすることを目的に論じるものはなかった。

そのため本稿では、「ピングドラム」の正体についてテキスト論的分析を行う。まず、先行研究に基づいて『銀河鉄道の夜』の「りんご」の構造を解し、それを『輪るピングドラム』における「りんご」に当てはめて分析する。次いで、タイトルの「輪(まわ)る」という動作にスポットを当て、作中に散見される「輪」を手がかりにピングドラムを探る。最後にピングドラムと「運命」の関連について述べ、ピングドラムが「命」や「運命」を内包する幾原独自の概念であることを明らかにする。

キーワード

幾原邦彦, 宮沢賢治, 銀河鉄道の夜, ピングドラム, 自己犠牲

はじめに

幾原邦彦(1964-)は日本のアニメ監督である。彼は学生時代に寺山修司(1935-1983)の主宰する演劇グループ、演劇実験室・天井桟敷に傾倒し、京都芸術短期大学(現・京都芸術大学)在学時には『田園に死す』(1974)で美術を担当した栗津潔(1929-2009)に師事した。1986年には東映動画(現・東映アニメーション)に入社し『美少女戦士セーラームーン R』(1993)から『美少女戦士セーラームーン SuperS』(1996)に至るまでシリーズディレクターを務めた後、1996年に東映動画を退社する。1997年には初の監督・原案を手がけたオリジナル連続テレビアニメ『少女革命ウテナ』(1997)(以下『ウテナ』と略記)を発表した。その後は『輪るピングドラム』(2011), 『ユリ熊嵐』(2015), 『さらざんまい』(2019)など、テレビアニメを中心に作品を発表し続けている。そして、幾原作品のどれもが例外なく意味不明で難解なメタファーや会話、他作品からのオマージュ、バンク⁽¹⁾の多用など他に類を見ない演出が認められる。とりわけ『輪るピングドラム』には、遠回しな表現や説明の欠如が多く見受けられる。その中でもタイトルにある「ピングドラム」という幾原の造語の詳細は語られることもイメージとして提示される

こともないため、その不透明さは残り続ける。しかし、物語が進むにつれて「日記」や「リング」といったいくつかの形態を持つものであることが示唆される。そのため、放送当時視聴者の間で起こった「ピングドラムとは何なのか」という論争は大きな話題となった⁽²⁾。これまでの先行研究においては、関連作品である宮沢賢治（1896-1933）の『銀河鉄道の夜』（1934）や、村上春樹（1949-）の『かえるくん、東京を救う』（2000）と比較して論じるものが殆どであり、「ピングドラム」の正体にスポットを当てて論じるものはなかった⁽³⁾。

そこで、本論では『銀河鉄道の夜』や賢治の諸作品に登場する「りんご」のトポロジーを援用しつつ、「輪（まわ）る」という言葉を手がかりにピングドラムが「輪廻」や「運命」を示唆していることを明確にする点に趣旨がある。

以降、『銀河鉄道の夜』に登場するものを「りんご」、『輪るピングドラム』に登場するものを「リング」と表記して区別する。まず、『銀河鉄道の夜』における「りんご」の構造を詳らかにし、それを『輪るピングドラム』に登場する「リング」へと敷衍することで、「リング」の意味するところを論じる。次いで、タイトルの「輪る」に焦点を絞り、作中に散見される「輪」を手がかりに何が輪（まわ）っているのかを明らかにする。最後にピングドラムと「運命」の関連を示すことで、ピングドラムの正体を解明する。

1. 作品概要

幾原は『ウテナ』の放送から14年後の2011年に、監督・脚本を務めたオリジナルテレビアニメである『輪るピングドラム』を発表した。本作は2011年の東京メトロ丸の内線（作中ではTSM 荻窪線⁽⁴⁾とされる）沿線を舞台に、双子の兄弟とその妹を中心に「家族」をテーマに据えたストーリーが展開される。そして、幾原は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を下敷きに、実在の事件⁽⁵⁾を本作の一要素として昇華させ、愛や罪や罰、運命などの抽象的な言葉の裏にメッセージを潜ませている。加えて本作の魅力は、そのメッセージすらも抽象的に描く点、または、その抽象的な描写で視聴者に自由に作品を解釈する余地を与えている点にある。そして、幾原の美しく独特で難解な演出を用いて展開される強烈な表現に彼の作家性を見ることが出来る。本作について幾原は以下のように述べている。

2011年の震災で「僕たちの愛しいものは永久に存在しているものじゃない」ということを実感してしまった。みんな今までは「勝ち組だ、負け組だ」って話ばかりしてきたんだけど、そんなことはもういい…。それよりも、「明日、大事な人と会えなくなってしまうかもしれない」と考えた時に、何かそこで愛しいものが切実にあぶり出されてくる感覚があると思うんだ。それがいま、みんなが気にしていることじゃないかな？って。そこにコミット出来るような作品になれば良いと思った。⁽⁶⁾

2011年3月11日に発生した東日本大震災の後、人々の意識は大きく変わった。我々は未曾有の大災害を機に死を考えるようになり、「絆」という言葉をよく耳にするようになった。同年夏に『輪るピングドラム』の放送が始まるが、日本で1995年に起きた事件を仄めかす設定や、「家族」や「愛」を描くストーリーは非常に身近に、かつセンセーショナルに感じられた。シナリオライターの奈須きのこは、幾原作品について以下のように答えている。

絵柄ではなく内容そのものがあまりに違う文化圏で、理解が全然追いつかなかった。それなのに何度も見ちゃう。一見耽美で抽象的な世界の裏側に、すごくセンシティブで寓話的なものが存在している。本来なら説明しなければユーザーに切り捨てられることを、堂々と抽象的なままで表現する手法を『ウテナ』は第一話からやってきていた。[……] イメージをイメージのまま届けるというのはとても難しいことなんです。そんな、抽象的なものを表現してそのまま届けるということを幾原監督はあそこからずっとやっている。(7)

幾原は、「アニメを製作する上で大事なものは、理屈としてではなくイメージとしての帰結」(8)ということを目指している。それはつまり、物語作品において重要なのは伏線などのギミックを仕掛けることではなく、観賞後に抱いたイメージだということである。本稿は、作品に込められた監督の意図を読み取ることを目的とせず、「イメージとしての帰結」を言語化し作品の余白を埋めることを目的とする。そのため、読み進めるにあたって必要な本作のあらすじを以下に簡単に示す。

双子の高倉冠葉（たかくらかんば）・晶馬（しょうま）の兄弟には、病弱な妹の陽毬（ひまり）がいた。陽毬は不治の病に冒されており余命僅かである。彼女は、退院祝いに友達に連れて行ってもらった水族館で倒れ、そのまま亡くなってしまふ。しかし、霊安室で互いを責め合う兄たちの横で突然、死んだはずの陽毬が起き上がった。水族館で購入した「ペンギンを象った帽子」が陽毬に憑依したため蘇ったのだ。ペンギン帽に操られた別人格の陽毬（以下プリンセス・オブ・ザ・クリスタルと表記）は、兄二人に「妹の命を助けたければ、ピングドラムを持って来い」と命令するのだった。

プリンセス・オブ・ザ・クリスタルによると、ピングドラムとは荻野目苹果（おぎのめりんご）という少女が持つ運命が書かれた日記のことであるようだ。冠葉と晶馬は陽毬の命を救うため、ピングドラムを手に入れるべく奔走することになる。

物語中盤、冠葉と晶馬、陽毬の三人が実の兄妹ではないこと、晶馬の実の両親が16年前に起きた地下鉄爆破事件を起こした組織の幹部であったことが判明する。日記は運命を変える力を持つが、その代わりに代償が求められる。苹果の姉・桃果（ももか）はその事件を防ぐため、自らの命を代償として16年前の爆破事件を食い止めたのだった。

ペンギン帽子で延命しながらも徐々に衰弱していく陽毬を救うため、かつての事件の首謀者である渡瀬眞惺（わたせさねとし）に唆された冠葉は、組織の幹部となって理不尽な世界に復讐しようとする。地下鉄爆破事件を企む冠葉を止めるため列車に乗り込んだ晶馬は、冠葉や陽毬とリングを分け合い、日記の力で運命を乗り換えた苹果の代わりに焼失する。冠葉もまた、亡くなるはずであった陽毬の運命を引き受けて命を落とす。

その後、冠葉と晶馬の存在は過去や現在からも消え去り、陽毬と苹果の記憶からも抜け落ちるが、二人が存在していた証拠は消えてはいなかった。陽毬は、自分にはいないはずの兄からのメッセージを受け取り涙を流すのであった。

2. 「リング」から考える

幾原は、インタビューで『輪るピングドラム』が『銀河鉄道の夜』を下敷きにした作品であるということを明言している⁽⁹⁾。以下は『輪るピングドラム』1話冒頭の、物語の核心に触れる重要な会話である。

少年1「だからさ、リングは宇宙そのものなんだよ。手のひらに乗る宇宙。この世とあっちの世界を繋ぐものだよ。」

少年2「あっちの世界？」

少年1「カムパネルラや他の乗客が向かっている世界だよ。」

少年2「それとリングに何の関係があるんだ？」

少年1「つまり、リングは愛による死を自ら選択した者へのご褒美でもあるんだよ。」

少年2「でも死んだら全部おしまいじゃん。」

少年1「おしまいじゃないよ。むしろそこから始まるって賢治は言いたいんだ。」

少年2「全然分かんねーよ。」

少年1「愛の話なんだよ。何で分かんないかなあ。」

(『輪るピングドラム』1話)⁽¹⁰⁾

「リング」や「宮沢賢治」への言及を含むこの会話を手がかりに、次節から論を進めていく。

2.1 『輪るピングドラム』における「リング」

『輪るピングドラム』における「リング」とは単なる果実としてではなく、何らかのメタファーとして繰り返し登場する重要なアイテムである。前節で示した少年達の会話の初め、リングが宇宙であるという台詞は一体どのような意味なのか。以下に、『輪るピングドラム』においてリングが重要なアイテムとして登場した放送回とその詳細を表にまとめた。

表 1

放送回 (脚本, 絵コンテ, 演出)	詳細
9 話「氷の世界」 (幾原邦彦・伊神貴世, 中村章子, 福島利規)	眞惻からリングを受け取った陽毬は, 1 話で生き返った 霊安室の場面へ向かう。
13 話「僕と君の罪と罰」 (幾原邦彦・伊神貴世, 幾原邦彦・古川知宏, 市村徹夫)	眞惻が持っているリングがアンプル(薬)へと変化し, アンプルの中身を投与された陽毬は再び生き返る。
19 話「私の運命の人」 (幾原邦彦・伊神貴世, 後藤圭二)	19 話ラストシーン, 陽毬の回想にてリングを持った幼 い晶馬が登場。幼い陽毬に対して「運命の果実を一緒に 食べよう」と持ちかける。陽毬はそれに「選んでくれて ありがとう」と答え, リングを受け取る。
20 話「選んでくれてありがとう」 (幾原邦彦・伊神貴世, 林明美)	晶馬の回想。幼い晶馬の手にはリング。 19 話の内容を補完する展開の後, 19 話のラストシーン が再び描かれる。
24 話「愛してる」 (幾原邦彦・伊神貴世, 幾原邦彦・山崎みつ え・中村章子・古川知宏, 幾原邦彦・山崎みつ え・中村章子)	・時系列は不明。鉄の檻に幼い冠葉と晶馬が入れられて いる回想。冠葉は自らの檻の中で見つけたリングを半分 に割り, 晶馬に差し出す。 二人の間で「運命の果実を一緒に食べよう」「選んでく れてありがとう」という会話がされる。 ・陽毬が「これがピングドラムだよ」と, 赤く蠢く球体 を冠葉に向かって差し出す。辺りにはリングが浮いてい る。球体が半分に割れた直後, 回想シーンが挿入される とともに, 冠葉が晶馬に差し出した半分に割れたリング のカットが映される。

この表からは、『輪るピングドラム』に登場するリングが陽毬, あるいは冠葉や晶馬の生命の存続のために機能するものであることが読み取れる。

9 話, 陽毬は眞惻からリングを受け取り, 1 話で自身が横たわる霊安室のシーンへ向かうがそれは所謂「夢オチ」という結末で処理される。しかし, リングを受け取った陽毬が自身の蘇生シーンへ向かうことは, リングが生命の存続に欠かせないことを示唆している描写に他ならない。また, 13 話でリングが陽毬を延命させるアンプルへ変化する演出はそのことをより強調している。19・20 話では, 誰からも愛されない「要らない子」になり世間からも見放され「透明な存在」になる寸前の陽毬に差し出される「運命の果実」としてリングが登場する。晶馬はネグレクトを受け衰弱していた陽毬にリングを手渡すことで, 「居場所」を与え「家族」として迎え入れた。このことから陽毬は, 晶馬を自らの「運命の人」であると認識する。さらに, 9 話や 13 話における身体的な意味の「死」を回避する役割を持つリングとは違い, 精神的な「死」を回避する役割をもリングが担っていることが分かる。また, 24 話の回想シーンでもリングが登場する。真っ暗な空間に浮かぶ鉄の檻に入れられ, 空腹で意識朦朧としている幼い冠葉と晶馬。これは, 両親が犯罪組織に属する二人の境遇を抽象的に描いたシーンと見做される。冠葉の檻にのみ現れたリングは, 存命するための鍵である。冠葉がそのリングの半部分を晶馬に与えたことで, 晶馬は生命の危機を脱することとなった。ここで晶馬に手渡された半分のリングは, 19・20 話で

描かれたように陽毬に手渡す場面で再登場する。そして、最後には巡り巡ったリングが陽毬の手によって最初の持ち主であった冠葉に還されるのだ。以下にその場면을詳細に示す。

晶馬「楽しかった、ありがとう。返すよ。あの日兄貴が僕に分け与えたもの。僕にくれた命…。僕たちの愛も…僕たちの罰も…みんな分け合うんだ。これが僕たちの始まり、運命だったんだ。」

(晶馬、左胸から赤くうごめく球体を取り出し陽毬に手渡す。)

陽毬「冠ちゃん、これが、ピングドラムだよ。」

(陽毬、球体を受け取って冠葉に向き直り、両手で捧げながら言う。)

(回想シーンの挿入)

(若い冠葉と晶馬が檻に閉じ込められているシーン。晶馬に差し出された半分に割られたリングのショット。晶馬は、冠葉にリングを分け与えられていたことを思い出す。)

(『輪るピングドラム』24話)⁽¹¹⁾

晶馬が左胸から取り出した赤い球体は、心臓を模したものと見做される。半分に割れたそれを晶馬から受け取った陽毬が、冠葉にそれを差し出すと、その直後に半分に割れたリングのショットが映し出される。これは、リングが命であることを示唆しているに他ならない演出である。

次節では、ピングドラムにおける「リングのご褒美」という側面から「リング」について探る。

2.1.1 「愛による死を自ら選択した者」

ここでは、『輪るピングドラム』1話冒頭の少年たちの会話にあった「つまり、リングは愛による死を自ら選択した者へのご褒美でもあるんだよ。」という部分に着目する。

作中において「愛による死を自ら選択した」者とは冠葉と晶馬を指す。晶馬は苹果の罪を引き受けて焼身し、冠葉は陽毬の死を引き受けてガラスのように砕け散る。つまり、二人は他人のため、自己犠牲の果てに命を落とす。では、二人に与えられたリングのご褒美とは何であるかを考えるために、プリンセス・オブ・ザ・クリスタルの言葉を手がかりにして論を進める。彼女は冠葉の心臓を「赤く燃える蠍の魂」と形容する⁽¹²⁾。この言葉は『銀河鉄道之夜』に登場する「さそりの火」という挿話が元になっている。以下にその詳細を示す。

[……] むかしのバルドラの野原に一びきの蝸がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見附かって食べられそうになったんですって。さそりは一生けん命遁げて遁げたけどとうとういたちに押えられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があってその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは

溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云ってお祈りしたというの、ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいちちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。って云ったというの。そしたらいつか蝸はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たって。(13)

蠍が自己犠牲の精神を持っていることと同様に、冠葉も自己犠牲の精神を持っている。このことは以下の眞俐との会話から知ることができる。

眞俐「妹のために百ぺんその身を灼いて、それで君に何が残る？黒こげになった醜い蠍の心臓？それとも真っ白な灰？」

冠葉「俺は何も欲しくない、欲しいとも思わない！ただ、陽毬さえいれば……。」

(『輪るピングドラム』13話)⁽¹⁴⁾

社会学者の見田宗介は「さとり火」における「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない。」⁽¹⁵⁾という表現について、蠍自身は自らが燃えている様子を俯瞰することができるという点を指摘する。

よだかやさそりは、どうしてじぶんの火をかならず見るのだろうか。それはその〈死〉が、わたしたちの生活世界の『死』とは異質のものだからである。だからこそジョバンニもいう。[……] それはこの〈死〉が、なにかのかたちで、くりかえすことの可能な死であることを暗示している。⁽¹⁶⁾

蠍が第三者の視点で自らの死を観測することができるのは、蠍が死にながら生まれ変わっているからである。敬虔な法華経信仰者であり、輪廻転生を強く信仰していた賢治にとって、自己犠牲による異質な「死」は再生が前提であり、「くりかえすことの可能な死」であった。では、そのような自己犠牲による死を遂げた者に与えられるご褒美としてのリングの役割とは何か。それは先に示した少年達の会話から導き出すことができる。

少年1「つまり、リングは愛による死を自ら選択した者へのご褒美でもあるんだよ。」

少年2「でも死んだら全部おしまいじゃん。」

少年1「おしまいじゃないよ。むしろそこから始まるって賢治は言いたいんだ。」

少年達は、「死は終わりではなく始まりを意味する」という「さそりの火」が孕む輪廻転生の思想から導かれる「自己犠牲による死は再生をもたらす」という賢治の生命観を引用している。そして、「自己犠牲による死は再生をもたらす」ことを裏付けるかのように、24話終盤、冠葉と晶馬がいなくなった世界で二人によく似た少年達が登場する。このことは、リングの持つご褒美を与えられた二人が再生した結果に他ならない。リングは「命」を体現するのみならず、「再生」という実りをもたらす果実なのである。

2.2 『銀河鉄道の夜』における「りんご」

これまで、『輪るピングドラム』における「リング」は「命」であり、「再生」の役割を持つということを論じた。

次節では、『銀河鉄道の夜』ないし賢治の諸作品における「りんご」のトポロジーを介してピングドラムを探ることを目的に据えて考察する。

2.2.1 「宇宙」と「天上」

『銀河鉄道の夜』でりんごが登場するのは、燈台看守がカムパネルラやジョバンニ、他の乗客にりんごを手渡す場面である⁽¹⁷⁾。その他、『青森挽歌』(1924)⁽¹⁸⁾や『氷と後光』(1924)においてもりんごが登場する。賢治の諸作品に登場するりんごは何を意味するのか。

日本近代文学研究者の原子朗は、賢治の描くりんごが「宇宙」と述べている。

詩〔青森挽歌〕の「(……きしやは銀河系の玲瓏レンズ／巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる)」がよい例だが、ここではりんごは銀河系(成分の殆どが水素)そのものであり、童話〔銀河鉄道の夜〕で乗客たちの食べる「黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果」は、地上のものならぬ天国の苹果であり、というより球形の天上界そのものであり、地上の現象界を片割れとする宇宙の象徴でもあろう。⁽¹⁹⁾

りんごが「宇宙」や「天上」を表象するのは、宮沢賢治研究者である萬田務の「〈苹果〉が天上を表徴するにふさわしいのではなかろうか」⁽²⁰⁾や、同じく宮沢賢治研究者である天沢退二郎の「賢治の世界において《汽車》と結びついてあらわれる《苹果》が他界性の表徴であることを示唆している」⁽²¹⁾という指摘からも見受けられる。また、見田はりんごの形態からそれが四次元世界の模型だという点に着目している。

りんごというものの形態にいちばん大きな、だれにでもすぐに目につく特質は、それが〈丸

いもの〉ということ、けれども同時に、ゴムマリのようにとりつくしまもなく閉じた球体ではなくて、孔のある球体であるということ、それもボーリングのボールのように、表皮のどこかに外部からうがたれた孔ではなくて、それ自身の最奥の内部に向かって一気に誘いこむような、本質的な孔をもつ球体であるということである。それは人間の禁断の知恵の源泉についてのよく知られている神話の中で、〈鍵〉の象徴として選ばれているように、存在の芯の秘密のありかに向って直進してゆく罪深い想像力を誘発しながら、そのことによって、とじられた球体の「裏」と「表」の、つまり内部と外部との反転することの可能な、四次元世界の模型のようなものとして手の中にある。⁽²²⁾

見田は、りんごを賢治の考えた理想郷である「四次元世界」⁽²³⁾と捉えている。このことは『青森挽歌』の初め数行から読み取ることができる。

こんなやみよののはらのなかをゆくとき
客車のまどはみんな水族館の窓になる
　　〈乾いたでんしんばしらの列が
　　せはしく遷つてゐるらしい
　　きしやは銀河系の玲瓏レンズ
　　大きな水素のりんごのなかをかけてゐる〉
りんごのなかをはしつてゐる
けれどもここはいつたいどこの停車場だ
枕木を焼いてこさえた柵が立ち

(八月の よるのしづまの 寒天凝膠)⁽²⁴⁾

詩の中の主体であるりんごを乗せて走る汽車が、いつのまにかりんごの中を走っているというように全景が裏返っている。この点について、見田は以下のように論じている。

そしていまこの長大な挽歌のはじまるころでは、詩人の乗っている汽車は反対にりんごの中を走る。〈汽車の中のりんご〉という心象は、〈りんごの中の汽車〉という心象へとうらがえされる。内にあるものが外にあるものに。外にあるものが内にあるものに。[……]そしてこのように、わたしたちが外部に見ているものの内部にいきなり存在している、という変換の自在さは、——このようなことをうけいれる空間感覚とともに、——じつはこの詩の冒頭の二行のうちに周到に用意されている。

こんなやみよののはらのなかをゆくとき

客車のまどはみんな水族館の窓になる

このとき詩人は、自分の乗っている汽車をその外からみている。おそらく黒くひろがっていった野原のはてからみているのである。わたしたちは、内部にありながら同時に外部にあるという二重化された眼の位置を、何の不自然さもないように詩人と共有してしまっている。⁽²⁵⁾

りんごを裏返すことが自在であるのは、りんごが内側から穿たれた孔を持ち、それによっていったん内側に向かって裏返されているという形状を持つからである。そのため、りんごの内部にいる我々は、外からりんごを眺めることができるといった視点の置き換えが自由であるのだ。自在な空間、宇宙、あるいは四次元空間を秘めたりんごは手のひらに乗るサイズの、まさに模型としてそこにある。そして見田は、りんごの持つ孔をカムパネルラが天の川付近で見つけた「その孔」（以下引用では石炭袋と表記）として捉えることが可能である点を指摘する。

石炭袋は、この宇宙の中のひとつの点でありながら、同時にこの宇宙の外にひろがり、この宇宙自体をもまたその中のひとつの点としてうかべているのかもしれないような、〈外部の〉空間への通路でもあり、露頭でもある。このようにして石炭袋は、宇宙空間の外部に向かって反転されたりんごの孔である。りんごといううらがえし可能な空間が、銀河といううらがえし可能な空間の中で、それ自体うらがえされたかたちに他ならない。⁽²⁶⁾

石炭袋がりんごの孔であるという指摘や、うらがえし可能なりんごと同じく自在な宇宙が表裏一体であるという指摘から、見田も萬田や天沢同様に、りんごを宇宙として捉えることが可能であると主張している。

次節では、りんごが表象するものとして、「宇宙」や「天上」以外のもう一つを挙げて論じる。

2.2.2 「死」

先に引用したが、『輪るピングドラム』1話の少年達の会話における「この世とあっちの世界を繋ぐもの」という部分からも、りんごが「死」というイメージと密接であることが窺えるのだ。

少年1「だからさ、リンゴは宇宙そのものなんだよ。手のひらに乗る宇宙。この世とあっちの世界を繋ぐものだよ。」

少年2「あっちの世界？」

少年1「カムパネルラや他の乗客が向かっている世界だよ。」

賢治作品でも同様に、りんごは死のイメージを伴って登場する。『銀河鉄道の夜』において、既に死んでいる姉弟がりんごの匂いととも登場する点について、児童文化研究者の村瀬学は以下のように言及する。

それはまさに《苹果は死のイメージ》であるということである。むろんここで言う《死》というのは微妙な意味をもっている。死んだ青年、姉弟が汽車に乗り込んでくる時「死臭」の代りに「苹果の匂い」がしたのだから、苹果の匂いも又死の匂いとして作者に理解されている所は当然見のがせない。(27)

加えて天沢は、既に死者である姉弟がりんごを食すことについて以下のように触れ、りんごが「死」を表象するものとした。

云ってみれば死者たちは、自らの死出の旅において、他界性の表徴であり、“死者の見る夢の内実”でもあるところの《苹果》を食することによって、他界性と夢とをまろともに体内化するのである。(28)

りんごは「宇宙」や「天上」のみならず、「死」をもイメージさせるアイテムであるのだ。りんごの孔は、先述したように内側から穿たれており、りんご自体を外部に向かって開いている。一方で、反転されたりんごの孔である石炭袋は、宇宙またはりんごの内部へと向かっている。両者は表裏一体であり、つまり、どちらも内部に向かいながらも外部に向かう孔なのだ。

それは宇宙がそれ自体、異の空間への出口をもつ空間でなければならないことを、詩人が直感しているからである。[……] ジョバンニがその切符をみると、「それはいちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見てゐると何だかその中へ吸ひ込まれてしまふやうな気がする」(29)のである。ジョバンニの切符がもうひとつの石炭袋、〈宇宙の出口〉であることはあきらかであるが、それは切符が〈どこにでも行くことのできる通行券〉であり、つまり時・空をこえるもの、人間の運命からの解放のメディアに他ならないからである。(30)

石炭袋の手前で銀河鉄道を降車した家庭教師と姉弟、そして、石炭袋を通過した後に消えてしまったカムパネルラなどの既に死んでいる者たちは、石炭袋（宇宙の出口）を通じて「ほんたうの天上」へと行き着く。彼らは死ぬことで「運命」から離脱するのだ。そのことは、文芸批評家の清水正も指摘するところである。

現実の世界で、善に生きようが悪に生きようが、そんなことはいっさい関係なく、死ねばすべての者が「ほんたうの天上」世界に到り着くことができるのだというのがわたしの考えである。[……] ただ作者賢治は「ほんたうの天上」へ到り着く三つの途を私達に示したのではなかろうか。そして、『銀河鉄道の夜』で描かれなかったのは第三の途、即ち石炭袋に突入し、そこを突破することで「ほんたうの天上」へと到り着く途である。⁽³¹⁾

りんごという「宇宙」は内部に銀河鉄道を走らせながら、孔（石炭袋）を通じて「ほんたうの天上」に繋がっている（図1）。「カムパネルラや乗客たちの向かっている世界」とは、りんごの孔を通じて行き着く「ほんたうの天上」を指しているのだ。『輪るピングドラム』における少年らの会話で言うところの「リングは宇宙そのもの」、「この世とあっちの世界を繋ぐもの」という部分は、これまでに論じてきたように、賢治の諸作品に登場する内部と外部がうらがえし可能な「りんご」のトポロジーを参照しているのだと考えられうる。

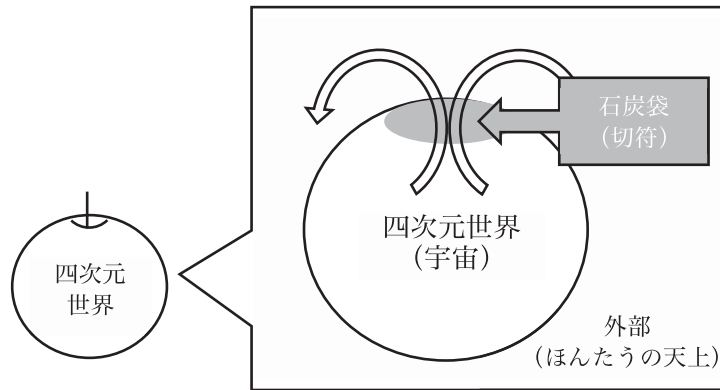


図1 賢治の「りんご」のトポロジー（筆者作）

3. 「輪（まわ）る」から考える

リングは「命」や「宇宙」、「天上」、「死」を表すアイテムである。それを踏まえ、本章ではタイトルにある「輪（まわ）る」という言葉に焦点を絞ることで、ピングドラムの正体を詳らかにする。

3.1 「輪」っている「リング」から生じる「罰」

表1で示したように、冠葉、陽毬、晶馬の三者関係において、リングが巡っていたことが明らかとなった。24話では冠葉からリングを分け与えられた晶馬、その晶馬からリングを分け与えられた陽毬が冠葉に「命（リング）」を返還する。また、これらリングの分け与え行為には「罰」が生じることに触れたい。2.1で引用した晶馬の「楽しかった、ありがとう。返すよ。あの日兄

貴が僕に分け与えたもの。僕にくれた命…。僕たちの愛も…僕たちの罰も…みんな分け合うんだ。これが僕たちの始まり、運命だったんだ。」という発言を参照する。

晶馬の言う「罰」とは、自分は事件の加害者の子どもである、という生まれながらに背負う自己の存在への「罪」を指す。しかし、それでは「僕たちの罰」という発言に違和感が生じる。晶馬がこのように言ったのはなぜか。24話での陽毬と晶馬の会話を以下に示す。

陽毬「ねえ、生きるってことは罰なんだね。私、高倉家で暮らしている間、ずっと小さな罰ばかり受けてたよ。」

晶馬「そうか、僕らは始まりから全て罰だったんだ。」

(『輪るピングドラム』24話)⁽³²⁾

陽毬の言葉に晶馬は驚く。晶馬にとって「罰」とは、自らの存在に対するものであるからだ。しかし、陽毬は「生きること」を「罰」と捉え、罰を受け入れている。晶馬は、自己存在の罪ゆえに陽毬が苦しめられていたわけではなく、「始まり（リングを分け合ったこと）」が罪であり、そのために理不尽な罰⁽³³⁾が存在したということを知るのだ。24話で晶馬が「僕たちの罰」と言ったのは、それが「運命の果実（リング）」ないし「命」を分け合った三者間に生じた罰を指すからである。「輪」っているのは「リング（命）」であり、「リング（命）」を分け合うという禁忌を犯したために三人に「罰」が生じたのだ。次節では、「何が輪っているのか」ということを突き止めることで、「輪（まわ）」る「ピングドラム」について考察する。

3.2 「輪」っている「輪」

「輪」という言葉には「車」や「わ」、「回転するもの」など多くの意味が含まれているが、本作における「輪」は「環」という意味で扱われている側面が強い。とりわけここで組上に載せるのは、作中において幾度も登場する、人物の周りを回る「輪」についてである。24話で陽毬と冠葉の周りを回っていた輪に着目する。

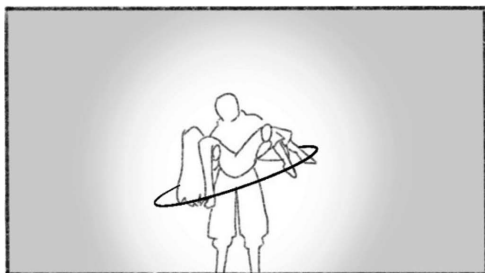


図 2-1 『輪るピングドラム』(24話, 00: 15: 36)

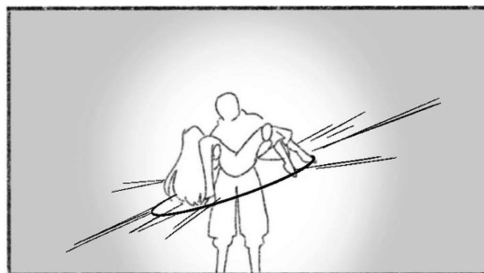


図 2-2 『輪るピングドラム』(24話, 00: 15: 38)

図 2-1, 苹果が日記を用いて運命を乗り換えている最中のショットは、異質な TSM 荻窪線列

車内が舞台である。このショットでは、息絶えた陽毬を抱く冠葉を囲うようにして「輪」が巡っている。しかしその直後、輪は破裂する（図2-2）。輪が破裂した後、陽毬をベッドに降ろした冠葉は徐々にひび割れていき、粉々に砕け散って跡形もなく消えてしまう。輪の破裂とともに、冠葉の自己犠牲による死が訪れたのである。晶馬も「運命の乗り換え」を行った苹果の代わりに自己犠牲の精神をもって命を落とすことで、『銀河鉄道の夜』の死者たちが石炭袋を通過して「ほんたうの天上」へと渡った⁽³⁴⁾ように、TSM 荻窪線のレールから弾かれて「再生」へ至るのだ。それは、運命を乗り換えるための列車が宇宙（リング）を走っているためと捉えることができるのではないだろうか（図3）。

列車内で冠葉と陽毬の周りを「輪」っていたのは、二人を結びつけていた「運命」であると考えてよい。それは、この輪が解かれ二人の間に何の繋がりも無くなってしまった時、陽毬は「僕たちの始まり」である「運命」から解放され、リングを分け合うことで生じた「罰」から脱するからだ。その結果、24話終盤に描かれる兄たちがいなくなった世界では、陽毬は病を患うこともなく学校生活を送っている。眞悧は、「運命」とピングドラムの関係について以下のように語っている。

「君は『運命』って言葉をどう思う？ 運命は実在する概念だと思う？ つまり、人の生涯は予め決められていて、決してそれにあらがうことはできない。そういうルールがあるってことを信じる？ [……] 僕はね、運命っていう概念が人の世界に存在するのか、そのルールが人の生涯を支配しているかどうか、それを確認したいんだ。君にもそれを確認してほしいんだ。僕と一緒に。そう、2人でピングドラムを探すのさ。そいつが本当に存在するのかどうか。」

（『輪るピングドラム』13話）⁽³⁵⁾

眞悧が「運命」の実在をピングドラムで確認できると語っているのは、それがピングドラムの中にあるからである。

ピングドラムとは、「命」や「死」、 「運命」を内包する宇宙と表裏一体のリングであり、幾原が生み出した新たな概念なのだ。

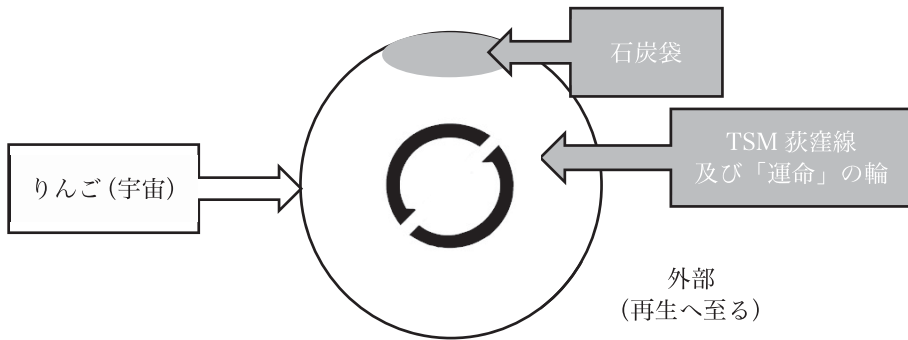


図3 『輪るピングドラム』における「リング」のトポロジー（筆者作）

おわりに

日本犯罪史における重大な事件が起こった1995年や、未曾有の災害に見舞われた2011年など、我々は人との繋がりを意識せざるを得なくなった。幾原はこの作品を通じて「家族」など血の繋がった関係性に限らない、真に繋がった「家族」の在り方を問うた。それは我々が1995年から現在に至るまで抱き続けている「愛しい人が明日死ぬかもしれない」といった想いを切実に語り、「命」と自らの「運命」について再考するために。

本稿は、幾原が目指した「イメージとしての帰結」を言語化するものである。筆者は作品の余白を埋めることを目的とし、一試みとして幾原が望んだ作品の受容の形を実践した。幾原は物語内に幾重にも難解な演出を仕掛け、その意図するところを観客から遠ざけるが、それを明瞭に理解できずとも意図の輪郭を読み取ることは可能である。それは、『輪るピングドラム』で描かれていたような繰り返す「輪のイメージ」や、「リングの分け与え」という行為が仄めかす神秘的な意味合いなど、それら全ての抽象的表現が作品意図を浮かび上がらせる仕掛けであるからだ。絶えず観客に自発的な想像力を促す幾原の演出は枚挙にいとまがない。今後も、幾原が作品に仕掛けた膨大な難問を解きほぐし、彼が作り上げたイメージの先を探ることでその作家性を明らかにしていきたい。

注

- (1) バンクとは、主に連続テレビアニメにおける魔法少女の変身シーンやロボットの合体シーンなどで繰り返し使用される映像を指す。毎週放送があるテレビアニメ制作現場において、作画コストの削減を理由に生み出された制作手法の一つ。その性質からバンクは子供向けアニメなどで多用される傾向にあるが、幾原作品においてはそのような一般的なバンクの使用方法とは異なった用いられ方が見られる。
- (2) 劇場版『RE:cycle of the PENGUINDRUM』公式サイト（最終閲覧 2022年6月30日）
<https://penguindrum-movie.jp/story/>
- (3) 西田谷洋, 2014, 『ファンタジーのイデオロギー：現代アニメ研究』ひつじ書房や, 青木優, 2015, 『〈輪るピングドラム〉論－〈運命〉に対峙する共同性－』『学芸国語教育研究』33: 2頁。

- (4) 作中に登場する Tokyo Sky Metro 荻窪線という架空の地下鉄線。吊り下げ式のモノレール車両を採用している。
- (5) 1995年3月20日に東京都で起きた同時多発テロ事件を指す。宗教団体オウム真理教によって現在の東京メトロ地下鉄車両内にサリンが散布され、多数の死傷者を出した。
- (6) 天野昌直, 2019, 『幾原邦彦展～僕たちをつなげる欲望と革命の生存政略～』, 幾原邦彦展準備会, 31頁。
- (7) 奈須きのこ, 青柳美帆子, 2017, 「わが魂を象るもの」『ユリイカ』49(15): 61頁。
- (8) ユリイカ編集部, 2017, 「〈対談〉獣に薔薇を捧ぐ」『ユリイカ』49(15): 9-21頁における幾原邦彦と中村明日美子の対談を要約したもの。
- (9) 幾原邦彦, 藤津亮太, 2015, 『輪るピングドラム Blu-ray BOX (限定版) 特典ブックレット』キングレコード, 92-93頁。初出は月刊ニュータイプ2012年3月号である。
- (10) 幾原/伊神 (2011, 『輪るピングドラム』1話, 5: 33-6: 05)。本稿において引用される台詞は『輪るピングドラム』(2015, Blu-ray, ピングループ, MBS)において筆者が採録したものである。
- (11) 同上 (2011, 『輪るピングドラム』24話, 12: 55-14: 22)。
- (12) 同上 (2011, 『輪るピングドラム』12話, 18: 26-18: 29)。
- (13) 宮沢賢治, 2020, 『新編 銀河鉄道の夜』新潮社, 249-250頁。
- (14) 幾原/伊神 (2011, 『輪るピングドラム』13話, 7: 42-7: 58)。
- (15) 宮沢賢治, 1974, 『校本宮沢賢治全集 第十巻』筑摩書房, 167頁。
- (16) 見田宗介, 2001, 『宮沢賢治－存在の祭りの中へー』岩波書店, 138頁。
- (17) 宮沢賢治, 2020, 前掲書, 234-237頁。
- (18) 1924年に関根書店から刊行された『心象スケッチ 春と修羅』に収録されている252行からなる詩(木村直弘, 2013, 「ハイパーテキストとしての《ギルちゃん》: 宮沢賢治による〈青森挽歌〉から〈マリヅロンと少女〉へのリンクをめぐる」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』12: 107頁)。
- (19) 原子朗, 1986, 「賢治童話を解くキーワード－苹果(林檎・りんご)」『国文学: 解釈と教材の研究』31(6): 147-167頁。
- (20) 萬田務, 1993, 「『銀河鉄道の夜』考－〈苹果〉をめぐる」『国文学: 解釈と鑑賞』58(9): 134頁。
- (21) 天澤退二郎, 1987, 『エッセー・オニリック』思潮社, 201頁。
- (22) 見田宗介, 2001, 前掲書, 5頁。
- (23) 賢治の考えた時間と空間を超えた理想郷。幻想第四次とも表記される。
- (24) 宮沢賢治, 1974, 前掲書, 149頁。
- (25) 見田宗介, 2001, 前掲書, 6頁。
- (26) 同上, 7-8頁。
- (27) 村瀬学, 1989, 『銀河鉄道の夜』とは何か』大和書房, 77-78頁。
- (28) 天澤退二郎, 1987, 前掲書, 202頁。
- (29) 宮沢賢治, 1973, 『校本宮沢賢治全集 第二巻』筑摩書房, 154頁。
- (30) 見田宗介, 2001, 前掲書, 8頁。
- (31) 清水正, 1992, 『宮沢賢治の宇宙』星雲社, 30-31頁。
- (32) 幾原/伊神 (2011, 『輪るピングドラム』24話, 9: 34-9: 40)。
- (33) 12話にて晶馬が不治の病を患う陽毬に対して使用した言葉。彼は、両親が起こした地下鉄爆破事件の罪を陽毬が背負っていると感じている。
- (34) 清水正, 1992, 前掲書, 28頁。
- (35) 幾原/伊神 (2011, 『輪るピングドラム』13話, 14: 25-14: 49)。

図版出典

図 2-1 幾原邦彦, 伊神貴世, 2011, 『輪るピングドラム』(ピングループ, MBS, Blu-ray, 2015)。スク

リーンショットを元に作者が作成した。

図 2-2 同上。

(文学研究科博士課程前期課程)